

# DMZ 非武装地帯 追憶の三十八度線

2005(平成17)年6月27日鑑賞〈東映試写室〉



監督・原作・脚本＝イ・キュヒョン／出演＝キム・ジョンフン／パク・ゴンヒョン／チョン・ウンピョ／チョン・チェギョン／イ・ジェウン（東映ビデオ配給／2004年韓国映画／98分）

……20代のイ・キュヒョン監督自らの DMZ での捜索隊員としての体験を映画化！ 1979年10月、第2次朝鮮戦争の危機が……。その時イ・キュヒョン監督は DMZ の捜索隊員として20代の青春を送ってきた。25年間あたためてきた自分自身の体験をもとにした構想を映画化した話題作だが、ストーリー全般において少し個人的体験や、個人的感傷が強すぎるのでは……。？ 難しい題材の映画化だけに、もっと客観的な問題提起が欲しかったと思うが……？



## DMZ とは？

「DMZ」とは「De Militarized Zone」の略で、1953年7月27日の南北朝鮮の休戦協定の時に設けられた緩衝地帯のこと。これはいわゆる「三十八度線」上にあり、その広さは南北に4km、東西に248km。そして、この一帯には最小限の火器・兵力しか持ち込めないとのこと。



## JSA とは？

これに対して「JSA」は、「Joint Security Area」の略で、共同警備区域のこと。つまり、南北朝鮮を、1本の線（三十八度線）で別の国家として隔てている板門店地区で、互いに国境警備にあたっている共同警備区域のこと。

この「JSA」をそのままタイトルにした映画『JSA』（00年）は、『シュリ』（99年）ほどの出来ではなかったが、結構面白いものだった（『シネマルーム1』62頁

参照)。

## この映画は監督の体験談！

この映画は、イ・キュヒョン監督の体験をもとにつくられたもの。すなわち、20代のイ・キュヒョン監督は、1979年10月という激動の時代をDMZの搜索隊員として過ごしていた。突如起こった大事件の中、イ・キュヒョン監督は生命をかけて戦い、一生忘れることのできない体験をすることに……。

この映画の主人公キム・ジフン一等兵（キム・ジョンフン）は映画科の学生出身だが、これこそまさにイ・キュヒョン監督そのもの。そんなイ・キュヒョン監督は1979年から25年後の2004年、それまでずっと心の中であたためてきた「あの体験」を映画化することに。したがって、この映画については「個人的感傷」が強いのは当然……？

## 前半はちょっとダレすぎ……？

韓国では、約2年の兵役が19歳以上のすべての男子の義務。職業軍人になることを目指している人はともかく、そうでない人にとっては、どんな部隊に配属されるのか、また隊長がどんな人物なのかによって、そのしんどさが大きく異なるのは当然。

キム一等兵が配属されたのはDMZに駐屯する部隊だったから、ある意味かなりヤバいところ……？そして、軍隊という組織には必然的に非人間的で暴力的な面があるのは当然……？

キム一等兵やその仲間たちは当初、結構イジめられていたようだが、キム一等兵はイ・ミンギ兵長（パク・ゴンヒョン）と知り合い、イ兵長が属する搜索部隊に転属することによって、人間関係もうまくいくことに。したがってこれ以降は、キム一等兵にとっては危険で緊張感のある最前線での軍隊生活も、ある意味楽しい(?)ものに……。

その生活を描いた前半はイ・キュヒョン監督の体験談であり、青春時代の1コマなのだろうか、ちょっとくどすぎてダレすぎ……？

## 立派な地下トンネルだが……？

DMZ での搜索隊は常に緊張を強いられる過酷な任務。そんな緊張状態の中、南進をもくろむ北朝鮮は、真正面からではなく地下にトンネルを掘り、そこを通して国境突破を目指していた。これは誰でも考えつきそうなこと。そして、この映画で観る限りこのトンネルは意外に立派なもので、これだったら数千人、数万人規模の軍隊を十分動かさそうだが……？

DMZ における搜索隊の活躍によって、地下トンネルの存在は現実に確認されており、イ・キュヒョン監督が任務に従事していた当時、現実に3本のトンネルが発見されていたとのこと……。

## 北朝鮮のゲリラ侵入の目的は？

ところが映画では、このトンネルから韓国内へ侵入する北朝鮮のゲリラの数は数十名。

韓国へスパイとして潜入するためとか、大統領暗殺のためとかであればそれもわかるが、あれだけ大規模で立派な地下トンネルを完成させているのなら、もっと大部隊を送りこんで一気に国境突破を狙ってもいいのではないかと……？ 部外者(?)としては、ついそんな風に考えてしまうのだが……？

## イ兵長は理想的な直属の上司……

キム一等兵らの兄貴分となって、キム一等兵らの面倒を見てくれる頼れる上司がこのイ兵長。どこの出身で、なぜここにおり、除隊後何を目指しているのか、そんな詳細は映画には何も表れないが、彼はケンカも強いし歌もうまいしユーモアもわかるという理想的な上司。

こんな上司に恵まれたキム一等兵は幸せモノ……。しかしそれは、平時の話。朴大統領が暗殺されイザ非常の事態ともなれば、分け隔てなくすべての韓国の兵隊たちに危険と恐怖が迫ってくるのは当然。そんな中、イ兵長はもちろんキム一等兵も勇敢にその任務をつくり、戦ったが……。

## イ兵長の最後は？

別に油断したわけではないがイ兵長とキム一等兵の2人は、突然3人の北朝鮮のゲリラ兵に囲まれ手を挙げさせられた。そしてこのままでは北に連れて行かれることに……。そこでイ兵長がとった行動は……。それはこのまま「北」に連れて行かれたのでは韓国に残った家族は事実上、生きていくことができなくなるという覚悟の上に立った行動。

これは、戦時中の日本が「戦陣訓」によって徹底的に将兵たちに植えつけた「生きて俘虜の辱めを受けず」と同じような機能を果たす思想的バックボーンになったものはずだ。そしてその結果は……？

## これもホント……？

北朝鮮のゲリラ部隊は精鋭ぞろいだったが、数十名規模だったため韓国軍の捜索の中、1人、また1人と討ち取られていき、ついに最後の1人となったリーダーのり・ホンサ上等兵（チョン・チェギョン）も……。

ただしこれは、飢えとケガのため、瀕死の状態となっていたり上等兵を、イ兵長の死亡後にはキム一等兵の直属の上官となっていた軍曹と2人で行動していたキム一等兵が発見し、やすやすと捕らえたもの。意識を回復したり上等兵はポケットから財布を取り出してくれと頼んだが、その財布の中にはり上等兵の父親としての優しい顔とかわいい娘の顔の写真が……。

さらに続きり上等兵の頼みは、ここで撃ってくれということ。捕虜になれば家族に迷惑がかかることになるからと必死に訴え、ここで殺してくれと懇願するり上等兵の姿を見て、ついにキム一等兵は決心……。

しかし、これもホントの体験談？ もしそうだとすれば、これは明らかな軍規違反であり、軍法会議モノではないの……？

## バク・チョンヒ 朴正熙大統領暗殺！

1979年10月、突如大事件が勃発した。それは朴正熙<sup>バク・チョンヒ</sup>大統領の暗殺だ。朴大統領が軍事クーデターを起こして前大統領を倒して政権を奪取したのは1961年5月。

彼はその後、自ら大統領となり長期政権を築いたが、この朴大統領の暗殺を狙って北朝鮮のゲリラ部隊が大統領官邸を襲撃したのは1968年1月。そして、その報復のため1968年4月に韓国で創設されたのがシルミド部隊だ。これらの物語は『シュリ』(99年)や『SILMIDO (シルミド)』(03年)そして『大統領の理髪師』(04年)などで実に生々しく描かれている。

しかしその後「南北融和政策」が進み、シルミド部隊の解散に伴って、1971年8月には「684」部隊によるバスジャック事件が発生した。そんな中、韓国では朴大統領の長期政権が続いていたが、1979年10月に、この朴大統領が暗殺されるという大事件が発生した。これによって以降49日間、韓国は大統領不在という非常事態に……。

さあ、北朝鮮にとっては、ここは「イザ行動開始！」の大チャンス……？

## その長女は今？

去る6月20日に日韓首脳会談が開催され、小泉総理と盧武鉉<sup>ノムヒョン</sup>大統領が握手する姿が大きく報道されたが、日韓関係は現在冷えきったままで、反日感情はきわめて強い状態となっている。

これはいわゆる「368世代」と呼ばれる反米、親北の感情が強い盧武鉉<sup>ノムヒョン</sup>大統領や、その与党である「開かれたウリ党」の支持率が低下する中、その求心力を強めるため、というのがもっぱらの見方。

こんな衰退傾向にあるウリ党に対して、最大野党であるハンナラ党の党首として最近人気急上昇しているのが朴<sup>パク・クネ</sup><sup>クネ</sup><sup>クネ</sup>。朴<sup>パク・クネ</sup>は暗殺された朴<sup>パク・チョンヒ</sup>正熙<sup>チョンヒ</sup>大統領の長女で、これからの韓国政界の台風の目となりそうな人物。

この映画とは何の関係もないが、映画評論にも政治的観点を大いに注入する私としては、この映画を契機として観客の皆さんにはこんな点にも、ぜひ注目してもらいたいものだ。

2005(平成17)年6月28日記